

# 同潤会アパートメントの果たした役割

## ——青山アパートメントの事例に着目して——

高野 直弥（法学部政治学科3年）

指導教員：伊藤行雄

### 要旨

「同潤会アパートメント」は、関東大震災後の1920年代から1930年代にかけて、財団法人同潤会によって建設された集合住宅である。これらの再開発においては、一部で保存・継承を目的とした取り組みがなされたことが注目される。本研究では、唯一の保存事例である「青山アパートメント」に着目し、保存の要因を一般的な評価である歴史的意義とは異なる文脈から検討した。

まずは、2013年に現存していた最後の「同潤会アパートメント」が解体されたことを受けて、東京都内の14か所に所在したそれらの再開発における保存・継承状況について、文献調査や実地調査によって整理した。また、歴史的意義については、建設当時の評価を参照したうえで、社会的側面と建築的側面から説明され得ることを確認した。

一方で、戦中や戦後の長期間にわたって、歴史的意義は人々から認識されていなかったことを明らかにした。マス・メディアや建築界によるその再評価は、再開発のピークを迎えた1990年代以降になってから活発化したものであった。さらに、歴史的意義を根拠として行われた保存運動の実効性は、再開発時に保存を実現するには不十分であったことを指摘した。

以上を踏まえて、「青山アパートメント」がイメージ保存された要因について、「同潤会アパートメント」における特異性と、それがもたらした地域における象徴性という観点から考察した。そして、「同潤会アパートメント」の果たした役割とは、単に歴史的な文脈にその功績を遺したことにとどまらず、各地域における象徴という文脈からも説明されるものであることを明らかにした。

なお、本研究は共同研究「都市と土地利用」の一部である。